展 景

季 刊

No.82

Summer 2016

季刊　展景 82号

目次

水の惑星〈俳句〉……新野祐子　4
朴の木〈短歌〉……布宮慈子　6
三時草〈短歌〉……丸山弘子　8
慶州の春〈短歌〉……結城　文　10
わらび〈短歌〉……市川茂子　12
上り下り〈短歌〉……小野澤繁雄　14
念願成就〈短歌〉……河村郁子　16
春の移ろひ〈俳句〉……谷垣滿壽子　18
《招待席》春到来〈俳句〉……板垣　浩　20
東京歌会（第四十回～第四十二回）……22
坂道……松井淑子　30
〈那須通信27〉アイビー……加藤文子　32
〈鳥海山麓だより15〉ムコだから……鈴木京子　36
〈薫風颯々2〉Y君のこと……神村ふじを　40
対詠　ごきげんいかが？　PART 58……小野澤／布宮／河村　44
前号作品短評A……48
前号作品短評B……50
エッセイ教室「清紫会」の作品より
右にか左にか……小野澤繁雄　52
区立赤塚植物園……市川茂子　54
電話……大石久美　56
「清紫会」だより……59
無二の会短信……60
編集後記……64
今号のイメージ／キャベツ

水の惑星

新野（にいの）祐子

非戦の地脳裡に刻み鳥帰る

春の服平和の謂（いひ）として求む

耕して地球の裏側想ひけり

凧あがる声なき声のあがるやう

たぐひなき水の惑星種おろす

春光を乱反射させ鳥の群

水温む栗鼠（りす）の子育てたけなはに

春愁やうたたねの猫牙見せて

木の芽雨「散るぞ悲しき」読む日かな

惜春の虫入り琥珀流れ着く

朴の木

布宮慈子（やすこ）

飼猫の二匹に会へば明け方のまどろみ急に生き生きとして
二匹とも死んでしまひし猫なれどよそで飼はれて夢に会ひたり
われを見て気のなささうに目をつぶる猫はサティを聴きをり今も
蕗（ふき）出でて蕗煮る母のゐてうれし　そのほかのこと怪しけれども

骨なしの魚の並ぶスーパーに母へのひとつ選ぶわれの手
忘れたり忘れなかつたりこだはりもある　それぞれの老いのかたちは
野に近きくらしとなりぬ故郷に住まひし四年われらを変へて
ケンチユウは県立中央病院なりこの里を長く離れし者のあはれは
射干玉（ぬばたま）の黒衣の人へ花嵐けふ満開の桜を散らす
白き花ひつそり咲かす朴（ほほ）の木の幾十年といふ孤独の時間

三時草

丸山弘子

母まさば年女にて食器棚の奥に愛でゐし九谷の三猿

新年の雪に傾きし沈丁花それでも花芽のふくらみてきぬ

ふたたびの寒さ清掃車の過ぎしあとセグロセキレイ番で来てゐる

連れだちて過ぐる晴れ着の乙女らにあいにくの雨ビニールの傘

新装なりしスーパー商品の置き位置変り戸惑ひてをり

自粛とは表向きらし桜まつり公園広場に人ら賑ふ

見に来よと声かけくれぬ木蓮の紫ふるふる高きに揺るる

きのふけふ晴天つづき鉢植の三時草時刻違へずに咲く

買物もままならぬといふ友の電話脊柱管狭窄症の痛みつづくとぞ

三回忌はたちまちにして初鰹*の句碑ある弟の菩提寺に来つ

*「目には青葉山ほととぎす初鰹」山口素堂

慶州の春

結城　文

中国の黄砂にけぶる韓国の古都慶州の山並みやさし

赤や白むらさきつつじ咲きそろひ一足早き慶州の春

大手毬の白き花ゆさと紫陽花をぐうんと小さくせしやうな花

独特の反りの緊張うつくしき慶州民家の黒き屋根屋根

壁面に日本近代文学の書籍積みあげて郭氏の書斎

たうもろこし　にんにく　玉ねぎ　はうれんさう　こまごま育つ郭氏の菜園

韓国の農村部にも高齢の一人暮らしの殖ゆといふなり

菜園に植ゑし梅の木さみどりの小梅のぞかす葉むらの間

俳句詠む慶州の友の賜ひたる紫水晶のブレスレット

外出のたびに手首に巻きてをり濃き紫のさざれの小石

わらび

市川茂子

突然の揺れに驚く地震（ない）という地球に巣食う巨大怪物
忘れたき事ふいに顕（た）ちトラウマとなりいしものか消しがたくおり
地の揺れもなきによろめく足取りよ老いの心は常ゆれ動く
受け取れば旅立つときの切符かとマイナンバーの知らせ届きぬ

街路樹としてハナミズキの若木あり支えの棒にしばられながら
ひと雨のあと一斉に咲くつつじ色さまざまに樹下の華やぐ
表通りは人と車の通う路ウィークデーになりて静けし
地下鉄の駅に行き交う人の群れ五月の風を背にはらみつつ
休日もかかわりなきに起き伏しをいたわりながら静かに過ぎる
採れたてのわらびを買えば灰汁を抜き記憶に残る味付けをする

上り下り

小野澤繁雄

置物のようにも猫が犬がいて家にさし込む弥生のひかり

フルフェイスの人が急いで玄関を出入りする川のほとりの家に

野の川にかかりいる橋ゆっくりと渡る人みなシルエットにて

確かにも音は車の気配して待ちし姿は耕運機なり

定年はまた失職か人に「まだ働いているのか」云われもしたが

春の水を遡上しいゆく水鳥ら川土手にわれが追い抜いてゆく

おばあさんに大型の犬そこにまた躾けられいる気配がみえて

吉川は平凡なれど「吉川南」駅名の非凡さ耳にひびいて

極遅咲きという「開運」梅の花すでにおわりし梅林はずれに

上り下りは人のみならず丘を吹く風もやさしく上り下りする

念願成就

河村郁子

日暮里より成田空港へのスカイライナー　高速めざまし四年が経ちて
久しぶりの出国手続きぎこちないペットボトルを慌てて捨てる
手荷物と身体検査に反応あり調べ直して出国審査へ
パスポートと搭乗券を提示して審査官より証印受ける

動く歩道乗り継ぎ向かふ搭乗ゲート機体に真向かひ心昂(たかぶ)る
飛行機に乗り入る時のしきたりは機体に手を触れ「がんばつてね！」
17番Kとふ座席は窓辺なり右手後方にエンジン見ゆる
滑走路を出力全開テイクオフ　しばし背もたれに押しつけらるる
飛び立ちて眼下に大利根とゴルフ場額を窓に付けたまま見る
大病を超えての出立(しゅつたつ)ひたすらに生命の証を実感してをり

春の移ろひ

谷垣滿壽子

春立ちぬ香り豊かにレモンティー
墨匂ふ祝儀袋や梅白し
それぞれに本持ち寄りて春炬燵
上水の水面きらきら風光る

何もかも弾むが如し弥生きぬ
夕空に白く浮かびて初櫻
回り道花のトンネルくぐらむと
花吹雪追ひかける子の影愛し
虎杖（いたどり）は道草の子に採られたる
のせられて一つ買ひけり植木市

《招待席》

春到来

板垣　浩

初音聞く澄みし心地を持ち帰る

日一日木の芽膨らむ人老いる

甍へのひかり集めて大辛夷（こぶし）

椿落つ万の命日前にして

今日の風色なかりけり初桜

負けまいと誓ひし桜今年また

雪残る月山の裾花の雲

のどけしやポチに鼻歌吠えらるる

旅鞄棚でコトンと春の宵

うららけし人の名つひに出ず仕舞

板垣　浩（いたがき　ひろし）一九四四（昭和十九）年、山形県白鷹町生まれ。東京都日野市在住。所属結社「燎」同人。俳句は六十歳の定年退職後にＮＨＫ学園の初心者俳句教室でスタート。早くも十一年経過、未だに初心者同然で苦慮しながら楽しんでいる。「展景」同人の新野祐子は姪（姉の娘）に当たる。年々望郷の念強くなれども、帰省していないという矛盾と憂慮の日々でもある。

東京歌会（第四十回）

平成二十八年二月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十六首。出席者七名（池田桂一、市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

多死社会というコトバを読みぬ人数の多い世代にそのときがくる　小野澤繁雄

「多死社会」が判らないという。多死社会、は新聞の記事に出ていて、死亡者数が多くなり、人口が少なくなっていく社会のかたちで、超高齢化社会の次にくる社会だという。とくに団塊の世代が高齢に伴い死亡するピークと考えられる二〇三八年には、年間死亡数が一七〇万人と推計されるという。説明のあと、作者がそういう世代なのか、と。

診察の順待つ席に本を読む呼ばれて大きく返事に立ちぬ　池田桂一

待合では、知らない人と話をすることにはならない。作者は本を持ちこんでいる。名を呼ばれて、返事のしようは様々だ。下句、動きのある表現でそこにいるような感じがする。「返事に」は返事をして。

重ねぎを一枚脱ぐにためらいて天気予報は体に合わず　市川茂子

「重ねぎ」は、「重ね着」としたい。「ためらいて」は予報より寒かったことから。今の天気予報はいろいろ親切、したがって今の歌。下句は面白い表現、と。

母まさば年女にて食器棚の奥に愛でゐし九谷の三猿　丸山弘子

「年女」は干支が（ことしの）猿ということか。「食器棚の奥」ということで日常使いでないもの。「九谷の」もいい。「三猿」は小さい、置物のような、を想像した。よく言えている。雰囲気のある歌と。

遥かなる時を経しかな黄ばみたる楸邨句集読み了りたり　大石久美

二句切れ。楸邨句集は大事にしていた。作者は、さいきん読み直したものか。「黄ばみたる」を上句はよく説明する。歯切れもいい。短歌で俳句が言及されている。

新しき歌集のページの栞あと際やかに残りぬその思いはも　林　博子

作者のでない、他人の（それも）新刊の歌集か。栞（紐）は当初、任意のページ間にたたま

れている。その跡が（光の感じかで）ハッキリみることができる。そこに、何か著者の思いを読むことになった。想像をさそう歌のよさがあるという。

神奈川に最も多しとききてより車前草抜くをしばしためらふ　　中川禮子

「車前草」はオオバコのこと。作者同時歌に「広く深き根に支へらる」とあるような、抜くに少ししぶとさがある雑草。茎で遊んだ思い出がある。上句、何か思いが立ってくるのだった。歌の作者は神奈川在住。

山寺を車窓に見ればひと山が雪景色なり、さらに音なし　　布宮慈子

「山寺」の駅名からは仙山線、ここから作者名もしれる。まだ、山形県内。ひと山がまるごとというようなこと。結句「、さらに音なし」が皆いいという。達者な歌ということになった。

東京歌会（第四十一回）

平成二十八年三月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階和室。詠草は各二首十二首。出席者五名（市川茂子、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

すみれとは大工の墨入れ語りつつ生徒と帰りしかの日を思ふ　　中川禮子

「すみれ」は菫の花。大工さんが使う墨入れのかたちから来ているという。上句はその説明。帰りみちにみかけたのだ。教師が生徒とつれだって学校を下がる、というのも昔か。情景が眼に浮かぶ。二首続いてのすみれ。すみれの題詠のようでもある。ちゃんとできている歌と。

みるとなくマクドナルドにも郵便夫きて受け取りをするカウンターの人　　小野澤繁雄

郵便夫、は郵便配達夫。お店には郵便受けのようなものがないので、店内に入ってくる。作者も店内。接客中の人が受け取り（ある場合、手続き）をする、そんな場面。このままでいい、という。面白い。

雲間より数条の淡き光射しテレビにひびく鎮魂の鐘　　林　博子

三月十一日、多くの取材がその前後の日にも行われ、とくに、その日は終日といっていい。上句もそのなかでのことと読まれたが、眼前の光景という。「テレビに」の位置、前後からは、やや対比的構図が読みとれる。上句の視覚に比して聴覚のもの。

連れだちて過ぐる晴れ着の乙女らにあいにくの雨ビニールの傘　　丸山弘子

上句、成人式か卒業式か（卒業式という）。あいにくの雨なので用意がなく、ビニールの傘、となったか。下句簡潔だが、ややぶっきらぼうで、雨の唐突さそのまま。「ビニールの傘」が現在、いいとも。

高校の卒業記念にいただきし伊藤先生の水彩の黄よ　　布宮慈子

結句が少し縮まった表現。水彩、は水彩画か。「黄よ」は、二首続きの歌の「菜の花のやうなり」で納得される。黄色は明るい春の花の色で、菜の花もそのひとつ。二首セットにして読みたい。

色どりにパンヂーの鉢並びおりそこより春は広がりてゆく　　市川茂子

初句の「色どりに」に声が集まった。色とりどりに、だという。場所は、庭やベランダのようなところか。鉢は一つでない。そこから広がりが生まれている。下句がいい、今頃の季節の歌と。

東京歌会（第四十二回）

平成二十八年四月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

春の田が耕されつつ耕運機にまつらうごとし鳥ら動きは　　小野澤繁雄

古語辞典では「まつらふ（服ふ、順ふ）」は、従う、服従する、の意。耕されると土中の餌となる虫などが露わになる。したがって、そこに鳥が集まる。春耕。のびやかな景、のどかな感じ、と。

スーパーに力士の顔の幟立ちうらうらとして五月場所告ぐ　　布宮慈子

スーパー、はスーパーマーケット。力士名の幟が立っているような場所風景はテレビでみる。ここでは力士の顔の幟が特別だ。も一つの歌で、このスーパーは佐渡ケ嶽部屋を贔屓しているようで、幟の顔はそこの元大関琴欧洲らしい。景はいかにも「うらうらとして」いる。

受け取れば旅立つときの切符かとマイナンバーの知らせ届けり　　市川茂子

今の歌。騒ぎといっていいほどのことがマイナンバーの知らせ、にはあった。詐欺事件もあったようだ。作者は、高齢者でもあって、上の句には、やや自虐、シニカルな視線がある。面白い、という。「旅立つ」は、死ぬのえんきょく表現（新明解）でもある。

帽子掛（かけ）に帽子がひとつ下りいるあれは遠き日の夫の帽子　　大石久美

昔の人、ある時代の人は、帽子で職業柄がわかるようなところもあれば、季節で使い分けてもいた。ここでは、ご夫君の帽子。それが帽子掛（余り歌に出てこない）も含めて大事にされている。遠い記憶を眼前のものにしているようだ。

パック詰めの鶏卵庫内にしまう時取り落とさばや　かすか怖じいつ　　林　博子

「取り落とさばや」は、取り落とさないだろうか、といったところか。取り落としたことのある人ばかり、ということになった。しかしながら、歌で読むのは初めて。「かすか怖じいつ」もわかるよ、という声。表現には過不足がないか。鶏卵については、いろいろ思い出がある。

（小野澤繁雄）

坂道

松井淑子

病院への行き帰りに必ず通る坂道がある。片側は住宅が並んでいるが、もう片側は崖で、その下にはどこかの学校のグラウンドが広がり、崖の斜面には雑多な樹木が繁茂していてちょっと楽しめる道である。先日、その坂道を下っていたら、下から登ってきた男の人から声をかけられた。日ごろお世話になっている医師であった。

「いつもこの坂を通るんですか」

「はい、そうです」

そう答えると、医師は驚いたような顔をして言った。

「すごいなあ。私だってこの坂を登り降りするのは容易じゃないのに」

そう言われて、私はこの坂を〝坂〟として意識したことがないのに気がついた。それだけゆるやかなものに感じていたのである。

坂でまず思い出すのは、子供のころ住んでいた本郷の家のそばの坂である。あれは急な坂で、本当の名前は新坂というらしいが、親たちは胸突き坂と呼んでいた。あまりの急勾配（こうばい）に、登ってゆくとき胸がつかえそうだから、という意味らしい。

その坂の麓は、いまでは自動車の修理工場になっているが、当時は炭屋で、注文すると店の若い衆がこの坂を登って炭俵を届けてくれたものだ。いつぞや久し振りにこの坂を歩いてみて、あまりの急坂にあらためて驚き、ついでに炭屋の若い衆を思い出して、炭俵は担いできたのか何かに載せてきたのか知らないが、さぞ大変だっただろうと思ったことであった。

坂というとこの胸突き坂が頭にあるせいか、私は少々の坂道にはあまり驚かなくなっているのかもしれない。

病院への坂を下りきると、病院の駐輪場の前に出る。私は自分が自転車に乗らないのでそれまで気にもとめなかった駐輪場入口の看板を、あるときたまたま読んでみた。看板にはこうあった。

「ここは患者さん専用の駐輪場となっております」

〝駐輪場です〟でも〝駐輪場にしてあります〟でもなく、〝駐輪場となっております〟というこの言い方。まるで駐輪場自身が自ら駐輪場を名乗っているようではないか。そう思えた。

同時に、病院や医師たちの態度がとかく問題にされる昨今、〝駐輪場です〟ではあまりに素っ気ない、〝駐輪場にしてあります〟では病院側の意思が出過ぎて押しつけがましいなどと、病院の職員たちがあれやこれや考えた末に思いついたのがこの文言ではないかと思われ、おかしくなってしまった。

〈那須通信27〉

アイビー

加藤文子

庭を訪れる客人から、丈夫で育てやすいのはどーれと、聞かれることがある。
迷わずアイビーなら安心と、答える。
もっと変わった植物を期待しているのだろうか、アイビーという名に、なぜか人々は無反応。
せめてながめてから判断してくれても良さそうなものだが、ほとんどは、ああそうと言うだけで終わってしまう。
愛のあるやさしい言葉をかけると水は美しい結晶をつくる。そんな水の結晶に込められたメッセージをテーマにした興味深い本がある。
水の結晶からうかがえるのは、ひどい言葉をかけるよりいっそうダメージを受けるのは、無視することであるらしい。
こんな時、その話を思い出す。

実際のところ、アイビーが人の反応をどう受けとっているのかわからないけれど、いつの頃からか、聞かれてもアイビーを推薦するのはやめた。

町の緑化やお店のグリーンによく使われていて、昔からあまりにポピュラーなので興味がわかないのだろうか。

アイビーと聞いた瞬間、あたり前すぎて関心の対象から除外されてしまうのか。

私が育てているのは、巷（ちまた）で誰もが目にしているであろうごく一般的な種類である。

街の花屋で購入してから二十年以上になる。

丸味を帯びた葉は、いつの間にか細長いハート型になった。長いあいだに茎も木化して飛びはねたり、たわんだり自由気ままに育っている。

寒さは苦手といわれながら、厳寒期も特別保護をしなくても元気でいる。

常緑のグリーンの葉は、冬になると縁（ふち）の部分を小豆色に染める。それがまた風情があって雪景色によく似合う。寒さで変色した小豆色は、春のぬくもりとともに再びみどりになる。

茎の先端からうすみどりの新芽をのぞかせる春、みどりの充実する夏から秋、そうして冬の静かな色、気候を反映して四季それぞれに葉の色を変化させながら愛らしく生きている。

他の人からキレイネェ、ステキネェとほめられることはなくても、私にはキュートな存在にほかならない。

アイビー　育てはじめて 20 年以上になる。

Photo : Kato Fumiko

〈鳥海山麓だより15〉

ムコだから

鈴木京子

今年の冬は雪がかなり少なかった。だけど、だからといって、〝春〟がことのほか早く来るわけではないんだナ。タイヤ交換も、カボチャやメロンの植え付けも、稲の種まきも、せいぜい三、四日早まった程度だ。

砂丘の畑作のお手伝いを毎年させてもらっているカワマタ家に、今年は初めて稲の種まきに行った。専業農家のカワマタさん夫婦、公務員の息子、元公務員の叔父さん、入り婿して兼業農家をしているカワマタさんの弟のショウジさん、この五人で去年までは種まきした。ただ、ビニールハウスでソネを並べる仕事を担当する妻のケイコさんが、去年はかなりたいへんな思いをしたことと、七十歳近くなった叔父さんも無理がきかなくなったため、今年は「人員増」となったらしい。

カワマタさん、叔父さん、息子、ショウジさんの四人が、自宅の納屋で種まきし、軽トラック二台に積み込む。一台がいっぱいになるとショウジさんがビニールハウスまで運転してきて、ケイコさんと私、ショウジさんの三人で並べる。私とケイコさんは次のトラックが来るまで小休止できるが、ショウジさんは暇なく働く。サボらない。

「あっち（納屋）でもこっち（ビニールハウス）でも働いて。たいへんだから、こっちで少しサボってから行けば？」と私が言っても、声もなく静かに笑うだけで、サボらない。並べ終わるとすぐに納屋に帰っていく。

「ショウジさん、働き者だねぇ～」

「んだァ、ムコださげのっ」

ケイコさんによると、もともと偉ぶるようなことのない次男だったらしいが、「ムコ」として生きるためには「気が利く働き者」である必要があるらしい。

そういえば、人柄を形容するのに「いかにもムコさん」「ムコさんって感じの

田植え直後の鳥海山。田植えが終わると、こんなチョボチョボの苗なのに、人間の目には一面の田んぼが黄緑に見えます。写真で表現できないけれど。

人」という表現をよく聞く。仕事先で一緒になったシルバーさんの一人は、先回りしてよく働くことに私が感心したら、「だって、オレ、ムコだものぉ」と自分で言った。この地域では「入婿が三代続けば蔵が建つ」みたいなことも言う。

その家のために尽くすことを自らに課し、そして世間もそれを期待する――生家を離れ〝よその家〟に入って生きるとはそういうことなのか。だから、たいていの人は「ムコさんだからたいへんだ」と気遣う。

じゃあ、ヨメは？　ムコ四％、ヨメ九六％が日本の現状ですからネ。

Photo : Suzuki Kyoko

〈薫風颯々 2〉

Y君のこと

神村ふじを

三十八年間、学校というところに勤めていた。教職を去った今でも車で学校の側を通りかかったりすると、何となく校舎に目を遣ったり子どもたちの様子が気になったりしてしまう。職業病めいたところがあって嫌だなと思ったり、こういう世界で生きてきたのだから仕方ないと変に納得したりしている自分がいる。

新採の地はへき地準級の小さな山の小学校だった。自然に囲まれて育つ、人を疑うことなどまず知らない純粋無垢（むく）な子どもたちだった。高度経済成長時代にあって、この子たちが生きていく上でどういう力が必要か悩んだものだった。例えば話す力、文章力など町場の子どもたちに決して負けない力、どこに出て行っても通用する力を付けてやりたい、そのような思いでがむしゃらに過ごした三年間だった。

自然に囲まれた学校は、春はカタクリに彩られ、山毛欅（ぶな）の新芽の萌黄（もえぎ）色、川を渡る涼風、秋空を

染める紅葉、一面の銀世界と、「自然」と「命」の躍動を感じる地であった。いじめや不登校とは全く無縁。「命」の大切さなどあまり考えずに過ごしていたように思う。そこで私は、私にとって決して忘れることができない「命」に直面した出来事に出会った。

Y君は五年生になったばかり。農家の長男だったY君は座って勉強するよりも体を動かして過ごすことの方が好きで、素直で働き者でクラスの誰からも好かれていた。

ある土曜日の午後、父親といっしょに畑うないをしていた。機械が好きなY君は、それまでも父親にせがむことがあり、その時も自ら進んで耕耘機（こううんき）を運転していたのだった。ところが父親がちょっと目を離した隙に耕耘機のバックにギアが入った。その耕耘機は右ハンドルと左ハンドルが鉄の棒で繋がっているループ式のものであったため、そのハンドルに十歳の軽い体が持ち上げられてしまい、Y君は山の畑の崖下に投げ出された。そこに運悪く桑の切株があり、その根元に頭を打ち付けてしまったのだった。

異変に気付いた父親がすぐ救急車を呼び、町の病院に搬送された。私は土曜日の午後ということもあって、学校から自宅に戻ったばかりだった。給食のおばさんから事故を知らせる電話があり、急いで病院へ駆けつけた。救急車はまだ到着しておらず、遠くから次第に大きくなるピーポーの音に膝が震えた。

病院に着いたY君は、鼾（いびき）をかきながら肩で大きく息をしていた。医者はY君をひと目見るなり、「こ

りゃ駄目だ、県中、県中」と叫び、すぐさま県立中央病院へ転送された。
県中の医者から、Y君の状態が難しいと説明があった。この時ほど自分を含めて人間の無力さを感じたことはなかった。
Y君は三日間死と戦ったが、力尽き四日目に亡くなった。Y君が亡くなったことをクラスのみんなに伝える時、涙が止めどなく零れた。クラスのみんなと声を上げて泣いた。
全国の一年間の自殺者数は、優に三万人を超えるという。現実に打ち拉がれて破れる辛さはあるに違いない。だが、私にはY君の声が聞こえる。「そんなに粗末にする命だったら、僕にください。僕はまだまだ生きたかった。僕にその命をください」と……。

対詠　ごきげんいかが？　PART 58〈2016〉

O　小野澤繁雄
N　布宮慈子
K　河村郁子

ピチピチと肩先に鳴く小鳥らと思いいしのみみてはみえない　3月2日　O

いち早く目覚むるは鳥　うす明かりしてゐる窓に春の声して　3月7日　N

雀らの囀り知らず目覚めたり餌皿の上の麦粒ひとつ　3月9日　K

あしもとという小ささに地蔵さま目鼻もないに供花に菜の花　3月15日　O

早春を告げてふはふは黄に咲くは兄植ゑしとふマンサクの花　3月25日　N

南伊豆の菜の花畑ええうと強（こは）き雨にもめげず広ごる　3月26日　K

春の川水のおもては穏やかにまじりあう波ときに戻り波　3月29日　O

風吹いてひと月遅れのひな市が立てばふるさと春になりたり　4月2日　N

花咲けどパソコンに向かふ家ごもりさ庭の八重の椿と語らふ　4月6日　K

東京の人そんな言葉も古りしかなマクドナルドに『雪国』を読む　4月7日　O

雪国に桜のつぼみ色づきて井上ひさしの吉里吉里忌なり　4月9日　N

老いの手がつまみ菜摘みてわれの手へ「今夜のおひたしおいしくなるよ」　4月13日　K

畑中をさらにも囲むひとところ梨畑に花波打つばかり　4月16日　O

畑中の道きらきらと自転車が弾みて行けり高一ならん　4月21日　N

街中に夜来の雨の露のこし区民農園の若菜いきいき　4月22日　K

あるときに気づいて手にもとりし茶に八女茶（福岡）読み「やめ」もしる　4月26日　O

レスターは岡崎慎司のゐるチームにて英国のへその位置と知りたり　5月4日　N

慶州に遠山のぞみ憩ふとき新羅の女（をみな）と語らふここち　5月7日　K

括られて云う春秋か新羅王チュンチュ（春秋）が成しし三韓一統　5月9日　O

「冬ソナ」をまとめて観ればハマりたるわれを恐れて以後近づかず　5月13日　N

新羅よりの慣はしらしも客人(まらうど)に妻女は給仕す同席なさず　5月15日　K

夫婦して春の畑に出ているか小(ち)さき耕運機に音は大きく　5月22日　O

楽しみに畑へ行けばオレンジの亀虫、天道虫の幼虫もゐる　5月29日　N

丈低く剪定したる庭の木の新芽が枝になりて広ごる　6月2日　K

飼われてもいるかのようにとり声が一つ家内(いえうち)庭をはなれず　6月6日　O

郭公の縄張りならむ朝なさな電線に来て鳴くオスがゐる　6月11日　N

堀辰雄記念館を辞するときまむし草二本が見送りくれる　6月14日　K

人と犬またはスマホか発報のごとくに声は草かげに生(あ)れ　6月20日　O

前号作品短評Ａ〈小野澤〉

●亡き人の初陽の部屋に正座せり　谷垣滿壽子

初陽は、初日に同じ。元旦の日の出をいう。亡き人が使っていた部屋か、畳の部屋のようでもある。「正座せり」は改まった動作。いかにも元旦。亡き人はご夫君か。

一つ置いて、次の句。遺影前、の遺影も同じ亡き人のものか。

好物の雑煮もありて遺影前

「もありて」がいい。名残のような連続感、温かみ。

「新年」が一連タイトル。おおよそは生活句、なかに時間の切れ目であり、更新であり、改まったものがある。

●４Ｂで引く傍線に冬の雷（らい）　新野祐子

前後の句に手がかりはないが、何か作業のようなことに４Ｂ（の鉛筆）を使っているのだろう。添削か選句か。冬の雷が挿入され、そうした時間、場所が一瞬中断された。「４Ｂ」がいい。

雪に寝て天使の翼作りけり

腕をのばして雪の上に（上向きに）横になった。その跡。天使が翼を広げているように白くかたちになって残った、というようなことが読み取れる。あるパフォーマンスだが、想像上の行為でもいい。

●じぶんじぶん自分にかまけてゐるうちに子は育ちをり子を持つまでに　布宮慈子

「自分にかまけて」と云っているが、遊んでいた訳でもない。それでも子は育つ。その子に子供も生まれた、という。上句には、跳ね回ってもいたような「じぶん」の時間をみる思いがある。たまたま育休中の娘と過ごした。イルカショーを見た。それがいくつかの歌になっている。ところで、次の歌は、子の歌、その次の歌は子を持ったその子の歌だろうか。ともに切ないものがある。

越すときに娘は泣けり武蔵野のはづれの団地　きみのふるさと

小さくてわからぬひとはひたすらに手すりを噛みてイルカを見ざる

●カーテンの隙よりのぞく雪の庭尾の長き猫ゆるゆる歩く　丸山弘子

ここでは「雪の庭」と庭であることが云われているが、一連「一月」で詠われているのは、おおよそ庭のなかでのことだ。

何かちょっとのぞく。雪の日は寒いのだから。そこに猫がいて尾が長い、あるいは尾を立てているので長くみえる。かまわず尾の長き、と云ったところがこの歌のよいところだ。隙、でなく隅だが、続きのこの歌も同じに寒さきびしい朝のことである。

この朝（あした）寒さきびしく庭隅のメダカの瓶に氷張りたり

前号作品短評B〈慈子〉

●わが肩にふと止りたる緋の一葉幼き少女の放ちし便り　　結城　文

「緋の一葉」は、赤いはがきか便箋か。幼き少女は、親しい間柄のように思える。予想していなかった少女からの便りが作者を立ち止まらせ、その赤い色が作者の心を明るくしている。そのほか、短歌についての思いが表出された作品が多かった。

日本の四季頽(くづほ)れしごとき年なれど秋くればなほ日本の詩歌

なぜ歌を詠むのか自らに問ひながら屈曲多き川に沿ひゆく

●裏沼に降りる石段は蔵壁の土に埋まりて早や五年過ぐ　　池田桂一

題は「大震災より五年」。一連は日常生活を淡々と綴っているように見える。しかし、最後の歌がいちばん言いたいことだろう。福島というととかく原発事故に目がいきがちだが、福島とて地震の影響はいまだに残っている。それも何も手をつけられない状態で。年とともに変化してきているものの、作者の怒りは収まってはいない。

診察の順番呼べる声ひびき待合室は咳ひとつ無く

●目の前の工事は電柱撤去にて今おもむろに倒されてゆく　　市川茂子

質量のある電柱が倒されていく様子がうまく表現された。中ほどまでは説明調だが、それもまた一役買っているのかもしれない。「おもむろに」が効果的。短歌のおもしろさとは何か？　作者の意図を超えた言葉が読者に伝わり、広がりをもったときである。現代を観察した歌もある。

向い家の婦人が施設に入りしより住み人なくも夜通し灯る

●丘はまた墓地でもあれば夕がきてでこぼことするその影の濃く　　小野澤繁雄

「夕」は、音を考えると「ゆう」だろうか。丘陵には墓地がつくられていて、夕日が当たると陰影が出る情景を表現した。作者と丘にある墓地との位置関係がはっきりしている。墓地をどんどんつくっていって、しまいに丘はどうなるのだろう。「夕」と「影」が人間の生きている時間、死んでからの時間を感じさせる語となっている。草に埋もれそうな石仏もある。

石仏はかたちのこして川水のながれ止まざるほとり草なか

●紅梅の蕾の並(な)むる枝の雪あやしきまでに静もりかへる　　河村郁子

雪が降って音のない庭に紅梅の赤がきわだっている。赤と白、さらに雪の日の静かさを加えて、よくわかる歌である。ポイントは「あやしきまでに」だろう。作者の住む東京では、年に一度あるかないかの珍しい朝なのだ。誰かが童になったような楽しい歌もある。

座敷より童呼(わらし)ぶらし早うはよ雪に埋まる万両起せ

エッセイ教室「清紫会」の作品より

右にか左にか

小野澤繁雄

定年後のその二年目が終わろうとしている。元の職場にこの年度は週二日の約束で勤務しているので、二日つづいて働いたあとなどでは、連続五日間の休みだ。

これは、定年前の年末年始六日間の休みに近く、むしろ長いくらいのものだ。年末年始は、若い同僚の話だと、それぞれ三日ずつ休んだような感じがあるという。

何か贅沢ないいかただが二日勤務でも一週間という単位そのままに疲れる。

休みの日の朝は決まって家を出て、近所を散歩する。決まったコースはないが、このところは川土手を歩く。ただ、夏場は草がのびて歩けたものではない。秋がすぎると、草も刈られてさっぱりとしたみちになる。

やや高さがあって、冬には遠く富士や浅間の、その冠雪した頂をみることができる日がある。みてしまうと、雪の富士や浅間は、何か風景を安定させる力があるなと思う。

三月になって光りが違ってきた。

帽子がきらいなボクは、ひざしを避けて、市街地を歩いている。角々で、少しコースを考える。チラシでみて開店したばかりのパン屋さんがある通りが気になったり、こどもたちが出た中学校に向かったりする。

歩きなれた通りばかりだが、季節や時間で違ってみえるものがある。

近隣公園で三人が、高校生か、ソフトボールのようなことをしていた。一人がバットを振って、一人が投げて、一人が守る。平日の朝なのに、学校はないのだろうか。

ベンチに年よりが四、五人集まっている。そのうちの立っている女がコトバをかけてきた。こちらもコトバを返す。ベンチにすわっている男が中型の犬を腕全体で抱いている。手で挨拶したが、おとなしい犬だ。

公園の外、一人年配の男が道一つ向こうを丁字路に向かって歩いている。突き当たって右に折れるのか左にか、しばらくみることをした。

右に折れてすぐのところには、ボクのいきつけの床やがある。

区立赤塚植物園

市川茂子

一度行ってみたいと思っていた「板橋区立赤塚植物園」。今年のはじめに知り合いの方を通じて、植物園のサポート事業に参加して下さいという案内が届いた。

それには氏名とメッセージを書いて、参加金額を添えて提出すると、植物名板（樹木板）を作って、自分の気に入った木や花のところに表示してくれるとのことだった。

植物園を見たことがないので、なるべく早く見ようと思っていたが、三月の終りになってから行った。地下鉄赤塚駅からバスに乗り換えてまもなくだった。

この植物園は、武蔵野の面影を残す、赤塚の丘陵地を活用して、広さ約一ヘクタールに自然や植物などを身近に親しめるようなところとして、一九八一年に開園された。園内には約六百種の樹木、山野草、草花などが植えられて、四季折々に見ることが出来る。

植物園に併設された「万葉薬用園」もあって、万葉集に詠まれた薬用の植物なども植えられている。近郊には美術館や郷土資料館、都立赤塚公園と、住宅街のなかにあるような感じで、交通の便もよく、気軽に出かけられるのに、見過ごしていた。

美術館だけは、友達が絵画教室に通っていた頃、文化祭のときなどに出展していたので、誘われて何回か行ったことがある。

遊歩道をまわっていくと、落ち葉や枯れ草の下から出番を待っているかのように綿を被ったゼンマイの頭が出はじめ、五、六本のか細いワラビも立ち上がっている。落葉した木々の下ではニリンソウやカタクリ、スミレもちらほら咲きはじめている。薬草や山野草の生える場所が分かるように植物名板が立っている。まもなく草や木が繁って花の咲く頃を思いながら、一通り見てまわった。

散策するには少し早いようだったが、天気もよく、お昼になったら幼稚園の子供たちが芝生広場にシートを広げて先生のまわりで賑やかにお弁当を食べている。近くに住んでいるらしい、サンダルばきの年配の方は、「今朝鳥の声がした。昨日まではまだ聞こえなかったから、今日はじめて聞いた」と言って、園内を管理している係員と話をしながら、毎日来ているような感じでまわっている。

田舎では、雑草や薬草などを分からないままに踏み拉(しだ)きながら遊んでいた。その頃の里山や屋敷のまわりに自生していた、同じ木や植物の数々を見ていると、昔に還ったような気分になって、遠い日の自然の景色が鮮やかに思い出される。

広報に出るイベントのあるときなど、季節の移り変わりを楽しむために足を運ぶようにしようと思った。

電話

大石久美

四月初旬、机の上の電話のベルが鳴った。受話器をとると、「モシ、モシ、沖ですが、暫くです。その後、お元気ですか?」と言う。

私は、思いがけない人からの電話で嬉しくなり、「あ、沖さん、なつかしいわね。私は、あの頃『炸』にいたけれど、今、『綱手』という結社にいるの、もう二十年ぐらい経ったかしら」と答えた。

しかし、電話の相手は、「いま、おいくつですか?」と聞き返したので、オヤ? と思った。

彼女は殆ど、私と同年齢の筈である。ふっとおかしいなと思った。

電話の相手は、私が押し黙ってしまったので、やおら、話しはじめる。

「去年の秋、御注文を受けました、薬師如来の像が出来上りましたので、選ばれました三十名の方々に、お届けするところです。何時、お伺いしましょうか。御都合は、如何ですか?」

寝耳に水の話である。私は、「ナニ、それ? 只(ただ)で頂けるの?」と聞き返す。

「いえ、御注文の品ですから代金は頂きます」と、沖と名乗る女の人は言う。

確か、一年程前、そのような勧誘があった事を思い出した。しかし、興味が無く、断った筈である。

私は、「注文した覚えがない」と、はっきり断った。すると、彼女は「そうですか、では改めて」と電話を切った。

暫くして、また電話音がした。

今度は、中年の男の声である。私は、改めて、「勧誘の電話はありましたが、申し込んだ覚えは無い」と言い切った。

すると相手は、「しかし、確かにお受けしてあるのですがね。それに、二万円位なら、お払いになられるでしょう」と言う。

「二万円、月にですか。その像は、いったい、いくらするのですか?」と、一応聞いた。

「月、二万円の分割で、四十?万円です」

何か、心持ち語尾がよく聞えない。

それに、申込書には、私の署名と印鑑が押してあるという。

私は、申込みをした覚えがないし、認印を捺した覚えもない。

私は、「冗談じゃありませんよ。そんなお金、私にはありませんよ。大体、注文もしないのに、したと言うのはおかしいですね。それに、私が書く筈も無い申込みの署名は、あきらかに他人(ひと)が書いたものですね。これ以上、言われるのなら、訴えます」

男は、「どこへ訴えるのですか?」と声を少し荒らげた。
男の声に私は、一瞬、言葉に詰まったが、「もう夕方ですね。息子がそろそろ帰ってくるでしょうから、息子と相談して決めます」と、電話を切った。
切ってから、迂闊にも、先の沖と名乗った人の電話でも、今の男からも、どこの会社か、社名を聞いていない事に気がついた。
まあ、私とした事が? やはり、こんな事態に当ると慌ててしまう事に、改めて気がつく。男から、その後、電話は無い。

「清紫会」だより

◆第140回　平成二十八年二月十八日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉池田桂一・汚点が付けば／林博子・歯のはなし／松井淑子・坂道
◆第141回　三月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階和会議室
〈提出作品〉市川茂子・ベビーアイロン／小野澤繁雄・右にか左にか／林博子・母の命日／松井淑子・イヌフグリ
◆第142回　四月二十一日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室
〈提出作品〉市川茂子・区立赤塚植物園／大石久美・電話／林博子・桜・さくら

（松井）

無二の会短信

◆今年もあっという間に、半ばとなってしまった。十月になると安達裕之君の七回忌であり、そして来年七月は、創刊者である布宮みつこさんの十三回忌でもある。この「展景」の集まりの源は上田三四二絡みであり、別の集団で十年余り続いていた〝三四二忌〟も解散してしまったが、「展景」は平成五年三月に創刊して以来、この四月で82号になった。25号までは手作りで、その後は出版社（展望社）を通した。命名は、元東京大学名誉教授の今道友信著『詩と展景』（平成二年、ぎょうせい）から頂いて、誌名にすることを快諾して下さったと、みつこさんが夜中に近い時刻に、はずんだ声で電話してきたのを思い出す。当時は、作品や原稿が遅いと催促の電話は度々であり、知り合って間もないはずなのに、度重なる電話での会話で、旧知の友情のようなものが、次第に生まれていったのではと今では思っている。今年は、大役の二つが外れるので時間の余裕が出来るはずであったのに、町内会長役が残ってしまい、予定通りにいかない事情をかかえている。そんな訳で、多大のご迷惑を掛ける結果になったことを反省している。　　池田桂一

◆筍のおいしい季節になった。一人分の調理はやっかいだろうと言って、煮た筍を持ってきてくれた方。いま宅急便で茹でた筍が届いたので、すぐ煮てくださいと言って来る方。私のために筍ご飯と煮物を作って、わざわざ届けてくれる従弟。夕食のおかずに煮たので、少しばかりと言って持ってきてくれた。それぞれに家庭の味付けがあって美味しい。実家に筍山がある奥様は、毎年、筍掘りに行っている。その場で茹でたものを人数別に小分けして、おみやげに配っているようだ。此の度は私の分を、隣のお姉さんに一緒に煮てくれるよう頼んできたから、待っているようにと気づかってくれる。身近に居る方々の思いに感謝しながら、今年の筍は私にとっての当り年になった。　　市川茂子

◆日課の朝の散歩でも、飽きないように、また暑さ寒さもあることから、コースはつど変えています。それで、毎日のことなのに、柿若葉のあの何ともいえない初期を逸してしまうなど、残念なことがあります、今は、葉も厚く、光沢が出て、それも柿の葉には違いありませんが、やや暑苦しく光を反射しています。　　小野澤繁雄

◆今年の冬は雪が少なかったせいか春の足取りことの外早く、四月二十日には家近くの土手にある独活（うど）が丁度食べ頃になった。いつもは連休の少し前に畑を耕すのだが、周囲の畑は既に耕されており、まだ地温が低いのになと思いながらもそのままにしておけない気分になった。雪が消えた傍から草が生えてきてしまい、その生命力には驚嘆するのみである。連翹（れんぎょう）の黄が目に鮮やかである。　　神村ふじを

◆韓国俳句研究院の招きで慶州を訪れました。ここは世界遺産になっている新羅文化の歴史地区で、盆地には古墳や古民家や石仏なども遺され、ひと時のタイムスリップになりました。今年は「東アジア文化都市」事業の三年目で、中国、韓国、日本がそれぞれの各都市との文化交流が行われ、

日本は奈良市が担います。この事業の一端に、世界遺産のシルクロードを西安から慶州へ、更に奈良まで延伸する運動があります。国境を越えた多彩な文化の流れを再確認する好機になると思います。

河村郁子

◆寒かった冬もすぎ、例年並みに桜も咲きました。桜の開花は、桜前線という言葉も手伝ってか、何か心弾むのを感じております。近くの並木通りも満開となり、今年も、花のトンネルを眺めたり、くぐったりして大いに楽しみました。

谷垣滿壽子

◆三月五日、仙台市内で「第十一回ＧＭＯフリーゾーン全国交流集会 in みやぎ」があり、有機農業の仲間とともに参加した。遺伝子組み換え食品いらない！ キャンペーンで毎年開催している。遺伝子組み換え（ＧＭ）食品が日本の食卓に上ってちょうど三十年になる。この間でＧＭ作物の栽培は、世界の耕作面積の十数パーセントにも及ぶ。ＧＭ食品は日本人が世界で一番高い割合で食べている。自給率が極めて低いのに大豆製品を日常的に摂取しているからだ。アメリカではＧＭ食品による健康被害が顕著になり、ボイコット運動が起きている。日本でも生産者と消費者による反対運動を盛り上げなければ大変なことになると思っている。

新野祐子

◆先日、近くの大通りの街路樹の銀杏（いちょう）の天辺（てっぺん）に、小枝や針金のハンガーなどを束ねたようなものが載っているのに気がついた。鴉（からす）の巣である。まだ抱卵にいたっていないようだが、いずれ抱卵し、

雛がかえったら、親鳥は通行人を襲うようになるかもしれない。といって、撤去してもらうのも気の毒な気がするし……目下、心配半分、興味半分でときどき眺めにいっている。

松井淑子

◆四月におきた九州熊本・大分の地震。半月以上たつのにまだ毎日つづいている。住民の方の体のことや精神状態を思うと、心が痛む。少しでも役立つことが、と思っても年齢的にボランティアは無理。協力できることはわずかな寄附金だけ。そして揺れがおさまっても、その後の生活が以前通りになるまでに、どのくらいかかるか分らない。それでも地震の揺れが早くおさまる様にと、願っている。

丸山弘子

◆まもなく、ハルは十二歳の夏をすごす。私は十二歳の夏に何を思い、何をしていただろうとふと思った。足の大きさは私よりも大きい。背ももうすぐ抜かれそうだ。子どもと目線が同じくらいになるなんて、とても不思議。こういう一つひとつの気持ちをかみしめて、反芻していると、年を取るとはこういうことなのかなと思った。

山内裕子

◆二〇〇九年國際ペンクラブ大会が韓国の慶州で開催された折に知遇を得た郭大基氏から、彼の主宰する俳句研究院の十周年記念行事に招待を受けた。郭氏は慶州の大学院で日本文学を指導するかたわら、日本語で俳句を詠む方である。四月終わりの一番美しい季節に現地の文学者たちとの交流を深めることが出来、思い出深い旅になった。

結城　文

編集後記

◆四月半ばに起きた熊本を中心とした九州の地震。その後、大分、さらに四国でも地震は起きていて、揺れは完全に収まってはいない。さまざまな情報に接して、西日本を背骨のように貫く「中央構造線」と呼ばれる大きな断層帯があることを知った。といっても、東日本が安心なわけではない。東日本大震災が起きている以上、その揺り戻しが必ず来るという。いつ来るかはわからない。日本中、どこでも大地震が起きる可能性があるからには、つねに備えが必要ということだ。

◆ある女性たちの話を聞き書きとして残すためインタビューしたものを、テープ起こしさせてもらった。おもに昭和一桁生まれの人たちである。私が担当したのは、昭和三年、香川県生まれの人だった。もうすぐ八十八歳になるというその人は、戦時中、学徒動員で製紙会社に行き、秘密兵器の「風船爆弾」をつくっていた。もちろん風船爆弾という言葉は知らされず、陸軍の秘密兵器だから家族にも何もしゃべってはいけないと言われていた。和紙とこんにゃく糊を使っての作業はたいへんだったが、みな軍国少女だったので一所懸命に働いたというのである。その後、挺身隊として飛行機の部品をつくる軍需工場に行っているとき、昭和二十年の七月に高松に空襲があり、その中を逃げ惑いながらなんとか生き延びたのだという。

テープ起こしをしながら、リアルに当時の様子がつかめてきた。きちんと場を設けて話を聞くことの大切さがわかった気がした。

あらためて思ったのは、この「展景」を始めた故布宮みつこへのインタビュー記事がないことだった。彼女も昭和三年生まれだった。ときどきに聞いた事柄は一場面ごとに覚えてはいるものの、頭の中でつながってはいない。一緒に同人誌をつくっていることで安心し、もっともっと短歌やエッセイを書いてくれるものと思い込んでいた。彼女の半生を書くはずだった安達裕之も、すでに今はいない。たいへんに残念なことをしたという思いが強い。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊 展景 82号
二〇一六年六月二十三日　発行
編集・発行人　布宮慈子
制作　スタジオ・マージン
無二の会「展景」発行所
山形市上町二―一―七―二〇二
info@muninokai.com

Copyright© 2016 MUNINOKAI. All rights reserved.